

一茶の研究

藤本實世

茶之研究

高濱虛子題詠
荻原井泉水序
博文學高野辰之序
大江圭虫跋

藤本實也著

青葉書房刊

昭和二十四年六月十日 印刷
昭和二十四年六月廿日 發行

一茶の研究
定價四百五十圓

著者 藤本實也

發行者 市川節藏

印刷所 明和印刷株式會社

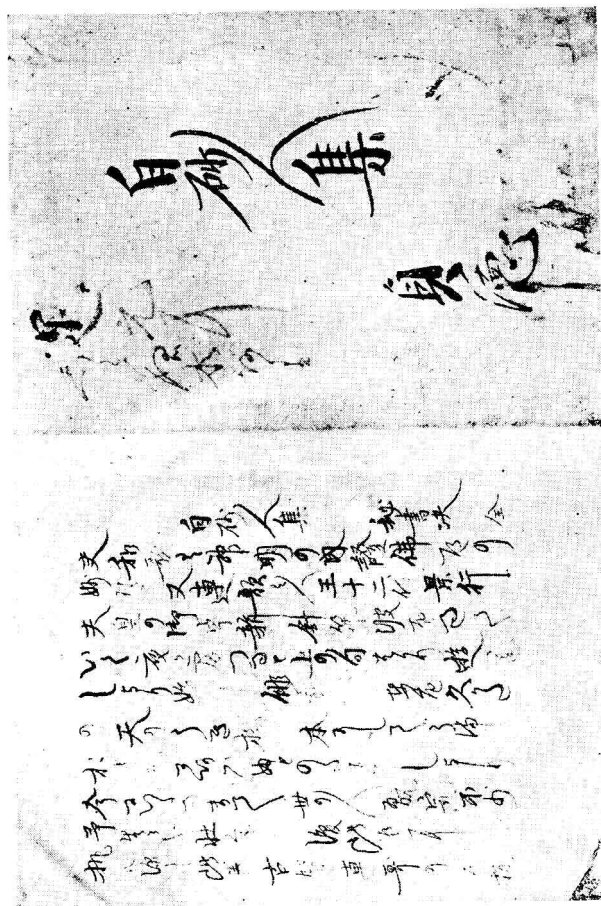
發行所 青葉書房



東京都千代田區西神田二丁目十番地
株式會社

電話九段三二一三番
振替東京一五八番

高濱虛子氏題



(藏氏實豐山本本京東)

大明七年 辛酉月吉

二卷 游机 卷一

二、栽培

許一雅

飛書在列

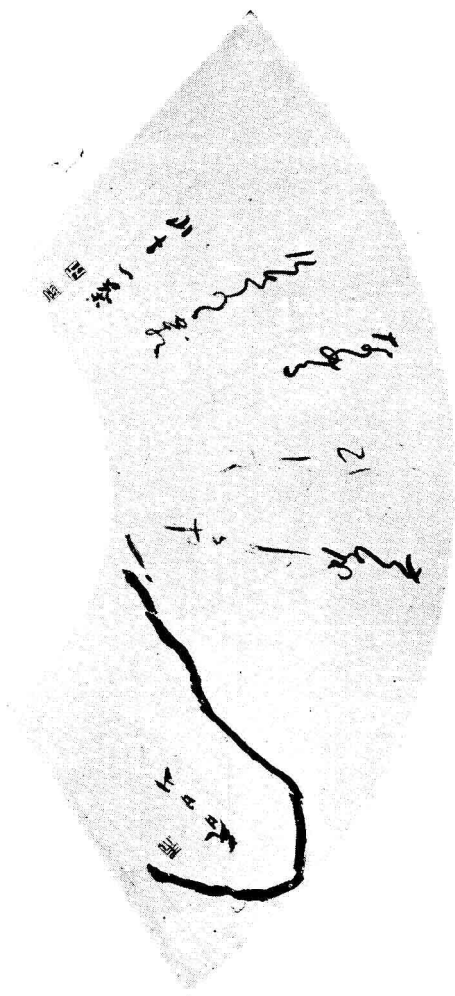
肯元祿六癸酉春

自耕一掃書為相
信一者

12

[illegible]

一、茶白畫讚扇面



(藏氏祐慶田保久 禮波信)

一茶筆俳諧歌書幅

俳諧歌

秋の老木根心雪より白上
 閑より閑なる心より心
 車
 下り坂なる家路の車
 山を越へくお首の車
 雲の行くはるき
 無常
 つひの世のふりつたふりつた
 曲なる葉のささる

兼能涪寺一茶

(信濃湯本五郎治氏藏)

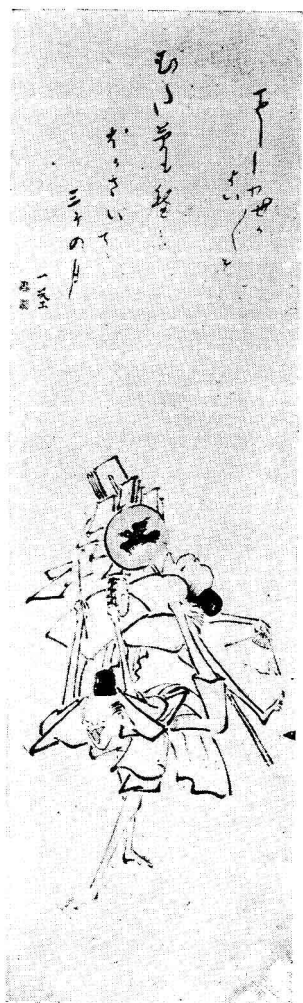


(越後宮崎長八氏藏)

一茶句讚

高津維平畫

六曲屏風半雙の内



(東京 本山豊實氏藏)

一茶及門人畫像合作

普通俳諧寺十哲像と言ふ



(信濃 小川清治氏藏)

序

「故郷や寄るもさはるも茨の花」と歎いて三十幾年を旅に漂浪した一茶は眞に家庭に恵まれなかつた人である。しかしながら情熱に富む斯人は「思ふまじ見まじとすれど我が家かな」と詠じて、かの草葺屋根のさゝやかな生家に愛着のきづなを斷ち得なかつた。いや家ばかりでなく、故郷故國を忘れ得なかつた。行くへ定めぬ雲水にも譬ふべき生活の間にも、たえず故山を想起してゐたことはどの想どこの景色を詠じ出すにも、北信濃言葉を些の憚りもなく使用してゐたことによつて判ぜられる。これが決して斯人が無學であつたが爲でなく、執拗な性分であつたが爲でなく、潜めてゐる僻み根性が露出した爲でもない。此のことは一茶の句四、五十も讀過すれば、すぐ會得せられるであらう。斯人は世に喧傳せられんが爲に、又其の句集

の賣行のよからんが爲に、また門人を多く集め得て實入りをよくせんが爲に作をするのでなかつた。そうして、和歌の道に尙んで來た幽玄を作の理想とした芭蕉や、寫眞や景趣に囚はれがちであつた蕪村等とは、行き方を異にして、自由に技巧少なに、飽くまでも眞實な告白をすることに熱してゐた一茶は、子どもの時から用ひてゐる北信濃の言葉が、其の感想にしつくり合するやうに思つた結果に他ならないと思ふ。

こゝに斯人の句を味はふには、斯人の念頭を去らなかつた出生地の柏原をはじめ、其の地方一帯の景觀のみに止めず、言語や習俗にも通じておく必要がある。嘗て柏原に近く生れた人の一茶研究書に序文を需められて、其の人が此の點に於て恵まれてゐることを述べた私は、今また之を藤本鶴夢軒主人の一茶研究書の上にも繰返さうと思ふ。主人は山口縣の御出身であれば、生地の東西に相去ることは二百幾十里であらうが、學窓を出で、直

に農林省生絲検査所に入り、一官三十年、夙に其の道の權威であることは、其の數々の著書によつて知悉せられてゐるのである。然るに其の好まれる處は文學美術の方面であつて、縁故をたどつて榮達の計をなさうとすればなし得る地方の出身者たるにも係らず生來未だ曾て相門の塵を拂はず、趣味に生きるを喜んでゐられたらしい。往年「松の日本」を著し、後かの大正の大震災に愛兒を失うては「焦土を凝視めて」の一書を知人に頒たれた。其の至情と文辭とは讀む者をして涙を止めかねしめ、私も貫泣をした一人である。今度多年の蘊蓄に成れる一茶の研究を公にされるに當つて、私が一茶の生地近く生れたといふ所以をもつて此の文を書かしめられることになつた。まさに委しかるべくして委しからぬ私は窮して、又しても北信方言通曉の必要を繰返すのである。敢て藤本君に難きを求めるのでなく、生絲産地の信濃へは其の本職關係からして、たび／＼足を運ばれたことであ

るべく、又一茶の故地を訪ひ、一茶がさびしく最後の息を引取つた、焼残りの物置小屋同前の土藏をも覗かれたことであるべく、名物の蕎麥に舌鼓を打つて激越な信濃言葉に耳を傾けて一茶の句を改めて味讀されたことを信じてかういふのである。

鶴夢軒主人は一茶に關する諸の著作や集を随分閱讀されてゐるやうに見受ける。又一茶の句は活字本によつて味ひ難く、あの枯淡な字稚拙な繪と併せ見て味ふべきものであるが、主人が其の用意に於て缺くる處の無かつたことは貧弱な私の藏品にまで目を通されたことで證し得る。

私の最も敬服したことは、主人がよしと認めた句幾百を抄出して世に問はれることである。これは實に行ひ易いやうだが、いよゝとなつては、駄句平句凡句俗句難句を採つたといふ譏の出ることを虞れて引込めることの無難を思ふ者が多い。しかるに主人は泰然として公にされた。私は其

の勇氣といふよりは、自信と坦懷とに向つて、眞實の敬意を表するのである。此の一章を以つてしても他の幾章かゝ此の高雅な態度の下に成れることを信じ、地下の一茶に會心の笑を浮べしむることを疑はないのである。

高野辰之しるす

序

萩原井泉水

近來、一茶の人及び俳句に就ての認識が一般に廣く又深くなりつゝあることは、喜ばしい次第である、明治四十二年頃だつたかと思ふが、信州の柏原に一茶同好會といふものが出來て、はじめて信州の一俳人としての一茶を世間に紹介しようではないかといふ運動が起つた。東松露香氏が「七番日記」を校訂し、中村六郎氏が「一茶遺墨鑑」をまとめた。それは會員制として頒布したのだつたが、所期の成績をあげえなかつた。大正三四年頃、私は露香氏から、「九番日記」を東京で出版したいから、何處か書肆へきいてくれと頼まれたが、當時、東京の書店で一茶の遺稿などを出さうといふ物ずきはなか

つた、六郎氏が「しだら」の原本を私の所へ持参されて頼まれたが、やはり同様だつた。それから一茶の百年忌がめぐつて來、「改造」で其紀念の論文を募集したりしたことも、一般的に一茶に就ての認識を植付ける機縁だつたに違ひない。それから關東大震災の年だ。復興の氣運と共に日本的なものに關する注意が喚起されて、芭蕉以後に一茶ありといふことが普く知られてきた。一茶は單に信州の一俳人としてでなくて、日本のりつばな俳人として仰がれてきた。一茶の遺稿で未刊行のものがあつたらば出版したいと、書肆の方から私の許へ申し出てくる程になつた。だが、皮肉なことに、露香氏が丹念に寫した「九番日記」等の原稿はその令息が所藏してゐて、震火に焼けてしまつて、「しだら」の原稿は六郎氏が流浪の旅に持つてあるいてゐたものと見えて行衛不明になつてゐた。然しこれらは一茶の眞蹟が別に残つてゐるので、私はそれに依て、改めて校訂をして、漸くこれらが活字とな